

【エッセイ部門・優秀賞】

私だけの衣替え

徳島市立高等学校 第2学年 別所 瑠璃

「いじめられてもええんやな」

「うん、ええよ。」とは言ったものの、眉間にしわを寄せつつ、どこか悲しそうだった父の表情のせいで、この言葉が忘れられない。私が、父に内緒で制服のズボンを購入し、後日父に伝えた時に言われたこの言葉。普段から「可愛い服を着なさい」「女らしくして」とよく言う人だから、段々“男らしく”なっていく娘の姿を見るのが嫌だったのかもしれない。私はそのまま自分の部屋に戻ったが、親に反抗しているようで、何だか申し訳ない気持ちになった。でも、やっと「自分のなりたいJK像」を手に入れたのだ。冬限定の、「私だけの衣替え」。後日、友人にズボンを履き始めた理由を聞かれても、「寒いとお腹を壊してしまうから。」としか答えなかった。それも本当なのだが、本当は、「スカートを覆いた自分」を見るのが嫌いなのだ。

小学生の頃、風でスカートがめくれてしまい、出くわした男子に嫌そうな顔をされ、元々人一倍他人の目を気にする性格だったため余計に恥ずかしく感じ、それがトラウマになってしまった。その頃から、スカートよりもズボンの方を好み、謎に「可愛い」よりも「カッコイイ」と言われる方が嬉しいという性格になった。別に、自分のジェンダーがどうのこうのという話ではないが、自分のスカート姿が嫌いで、恥ずかしいと思ってしまうようになった。中学校三年間は校則でズボンが無かったから、我慢していたのだが、履く度にあの頃の友達の嫌な顔を思い出し、恥ずかしくなる。まるで自分がそのことで笑い者にされているような心地さえしてきて、自分が“女”として生まれたこと自体が嫌になることもあった。高校生の制服を買う時、一度だけ両親にお願いしたことがあったが「髪の毛が短いから、髪を伸ばしてズボンを買うか、そのままスカートを履くか選べ。」と言われて、しぶしぶスカートを選んだ。

高校二年生の途中まで、スカートでの生活を余儀無くされていたが、ふと、自分の頭に「私は何故、人の為に自分のしたいことを我慢しているのだろうか。」という疑問が浮かんだ。私の好きな言葉に、「好きに生きろ。どうせお前の人生だ。」というのがあるが、まさにそういうことではないのか。どうせ私の人生。もし、ズボンを履いていじめられたり、影口を言われたりしたとしても、それを辛いと思うのはどうせ、私だけなのだ。何と思われてもかまわない。誰にも邪魔はさせない。そう思うと、今まで重苦しく感じていたものがなくなり、何だか体が軽くなった気がした。勇気を出して、比較的協力的だった母にお願いして、父には内緒で「寒いとき限定」という条件つきで、ズボンを買ってもらえることになったのだ。人一倍他人の目を気にする性格なのに、余計目立つであろうズボンを履

くことは、少々矛盾しているようにも感じられるが、疑心暗鬼で苦しむよりかは何十倍もマシだったのだ。

初めてズボンを履いて登校した日。少し周りからの視線が不安で、教室までの道のりがいつもより長く感じられたが、いざクラスメイトや友達に会うと、変に理由を聞かれたり、笑われているような様子もなく、むしろ「イケメンやん。」とか「似合っとるよ。」と、私のズボン姿を普通に受け入れてくれたことが嬉しかったし、気持ちが軽くなったのを覚えている。もちろん、今でも女子トイレに入れば驚いた顔をされることは多いし、他学年の知らない人にバカにするような態度で声をかけられることもよくある。(何が面白いのかよく分からないから、急に話しかけてきた気持ち悪い奴としか思わないが。)それでも、それが私が選んだ道なのだ。自分らしく生きるためには、必ずついてくるものだったのだ。何をされようとも、何と言われようとも、これが私。ズボンを履いた姿が、本来の私の姿なのだ。冬限定だから、すぐに過ぎ去ってしまうものではあるが、シンデレラのように魔法にかけられるみたいで面白い。どうせ私の人生。どうせ私の青春時代。充実しているかどうかは自分で決める。邪魔をするな。そう心で思いながら、私は今日もズボンを履き、好き勝手に生きていく。次の、「私だけの衣替え」まで。